
Precious Melody 2plus "Vividly";

七海くれは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Precious Melody 2 plus ” Vividly

【Nコード】

N42150

【作者名】

七海くれは

【あらすじ】

稀代のバカップル、森野翔司と水嶋音遠。

しかし音遠は、未だに兄への想いを忘れていなかった。

そんな中に音遠の兄、水嶋灯夜が語学留学から帰国する。

彼女はどちらを選ぶのか。彼氏が、それとも兄か。

「……ふっつ」

「うわあおっ!？」

朝早くから響き渡る情けない声の主は、森野翔司。私立牧田海浜大学、通称牧浜大学に通う大学2年生だ。

そして、そんな彼を起こす小柄な女の子。名を水嶋音遠といい、こちら牧浜大学に通っている。

学年こそ違うものの、彼らは四六時中一緒にいるので、キャンパス内のちよつとした有名人となっっているらしい。

「ちよ、音遠ちゃん……。耳に息吹きかけるのはやべーって!」

「だって、そうでもしないと起きないんだもん。かわいいうきやう」

そう言いながら嬉しそうに翔司に飛びつく音遠。毎日のように繰り返されている事なので、いい加減翔司も慣れていた。

そんな彼女を優しく包み込み、唇を重ね合わせる。

「……。えへ、おはよ」

「おはよーさん。さって……今日も学校かあ」

「準備は出来てるよね?」

「多分……。音遠ちゃん今日は何限?」

「私は……ちよつと待ってて。えつとね、2限と4限」

「あ、そうだった。4限一緒だったよね」

「うん えへへ、うれしいの」

「ついカオレ1限からかよ。マジうぜえ。……でも、この分なら余裕で間に合いそうだよ。音遠ちゃんのおかげで」

「まだ2年生のうちだね。必修がそのあたりに組まれてるのもあるし……」

「だよな。落としたら後々めんどくさくなるもんね……」

「私今のところフル単だけど……お兄ちゃんがいてくれたからなん

だあ。……お兄ちゃん……」

「だああああ！ だーかーらー、もう間もなく帰ってくるんだろ？」

「うっん？ もう帰ってきたよ？ 授業にも出てるし……」

「……は？ マジで？」

「うん。なんかね『留学したはいいけど単位足んねーよ！ ふざけんなよ、なんで3年になってもこんな履修しなきゃなんねえんだよ……』って言うてるの」

「その辺はよくわかんねーけど、灯夜の奴帰ってきてたのか！？ ったくあんにやる、連絡くらいよこせっての」

「その事なんだけど、実は翔司くんには秘密にしてたの」

「え、なんでよ！？」

「……怒らないで聞いてくれる？」

「怒るもんか！ 安心しな、どんどん言うてくれ！」

「ありがとなの……。あのね……」

音遠は勇気を振り絞り、兄……水嶋灯夜が帰ってきてから今までの事を翔司に告げた。

「お兄ちゃん〜！ 逢いたかったの〜！ きゃう〜」

「ぐぼはうあぁっ……！ て、てめえ……長旅から帰ってきた俺様に向かつて手荒い歓迎しやがって……」

「一緒にお部屋行くの〜！ 行くの〜！」

「だーかーらー待ってやがれってんだこの宇宙規模のバカ！ あとで構ってやるから！ てめーはさっさとつめてー飲み物でも持ってきやがれ！」

「はう……。わかったなの〜」

「ったくあんにやる……。まさか、俺がいねー間ずっと俺のごとしか考えてなかった……ってこたあねーよな？」

「お兄ちゃん、持ってきたの〜」

「待ってたぜ！ ほれ、さっさとよこせ！」

「はいなの」

「んぐ、んぐつ……ふい、生き返った。やっぱ我が家の水はうめ

ーなあ。……なあ音遠？」

「なあに？ お兄ちゃん」

「ちょっと聞くけど……お前俺がいなくて寂しくなかったか？」

「……すっごくさみしかったの。毎日泣いてたの……。くすん……」

「そう……か。そりゃ悪い事しちまったなあ。ごめんな」

「ううん、いいの。そのおかげで……ちよっぴり強くなれたし」

「お、気になるな。どういうことだ？」

「……あのねお兄ちゃん。私ね……実は……」

「うお、お前がそんなマジな顔するなんて珍しいな……。実は？」

「私ね……翔司くんと付き合ってるの……」

「ぶー……！？ は！？ 何それ！？ マジかよ！ ちよ、

待てよ。今まで生きてきた中で一番のサプライズだぜそれ！」

「うん……。私……お兄ちゃんを待てなくて……ずっとさみしくて

……。そんな時、翔司くんはずっと私に優しくしてくれたの」

「……まだ諦めてなかったのかよあいつ。未練がましいつつ……

……なあ

「そうだよね……。高校の時から私を好きでいてくれたんだよね……

……」

「あー、確かに。でもいい加減諦めたかと思った」

「お兄ちゃんがいるうちは……私にはお兄ちゃんだけって思ってた

けど、いなくなっちゃってからやっと……他の人が向ける気持ちに

気づけるようになったの」

「ほほう、それでそれで？」

「だから……私を好きでいてくれる翔司くんの気持ちに、真っ直ぐ

に向き合えるようになったの」

「そっ……か。さぞ幸せだろーよ、あいつも。……でもよ音遠。お

前何か間違っただけか？」

「なあに？」

「翔司と付き合うようになった。でもそれは……俺がいなかったからなのか？俺がいなくて寂しいから、その寂しさのはけ口としてあいつを彼氏にした……ってことはねえよな？」

「そんな事ないもん！」

「だったら……さつきから俺に抱きついてるお前はなんなんだ？」

「あつ……」

「だろ？結局お前は、俺とあいつを天秤にかけたら俺を選ぶような奴なんだよ」

「あつ……。違うもん……」

「違う？どこが違うんだよ。……ふざけるのもいい加減にしろよ。いいか？ここでもうハッキリさせるけど、俺とお前は実の兄妹。だから、愛し合っちゃいけないんだ」

「う……」

「ましてやちゃんとした彼氏がいるのにそーゆー事するなんて浮気じゃねえか。でもなければ、翔司に対する裏切り行為だ。お前の意外な一面を垣間見たね」

「あぐう……。違うのに……」

「だからどこが違うんだよ！言ってみろ！」

「……！」

「……っ！？何すんだ、やめ……っ！」

「……」

「どういつつもりだ。いきなり俺にキスなんかしてきやがって……」

「これが答え。……私は、お兄ちゃんも翔司くんも愛してる」

「なっ……。てめえ……！」

「2人とも同じように愛するの。それでいいでしょ？これなら間違っていないよね。天秤にかけたらつりあうよ」

「だから……っ！兄妹で愛し合っちゃいけないって……！」

「そんなこと誰が決めたの？」

「…………。翔司はどうなんだよ。いきなりそう言われて、あいつの事実を受け止められるのかよ!？」

「それは…………。今度逢う時言っよ。わかってもらう。事情話すから」「そうかよ…………。ったく、勝手にしやがれ! 疲れた。寝る。…………。さっさと出てけボケ」

「うん…………。おやすみなさい、お兄ちゃん…………。」

「…………。」

音遠の話を聞き終えた翔司は、動く事が出来なかった。それでもなんとか言葉を搾り出す。

「それ…………。本当のことなのか…………?」

「うん…………。」

「怒らないって言った手前怒れねーけど…………。ごめん、正直重い」

「…………。」

「ともかく、もうそろそろ行かないと間に合わないから行くよ。起こしてくれてありがとね。…………。んじゃ」

「待って! 一緒に行こ…………?」

「ごめん、一人にさせてほしい」

「あつ…………。」

音遠の引止めを半ば強引に遮り、翔司はさっさと出て行ってしまっ。

「あつ…………。やっぱり怒ってる…………。」

翔司の部屋に一人残された音遠は窓から外を覗き込むのだった。

空は少しずつ白んでゆき、間もなく雨が降り始めた。

「くそ…………。雨かよ…………。」

慌てていたため傘を忘れた翔司。濡れながらも自転車のペダルを漕ぎ続ける。

(音遠ちゃん…………。ウソだろ…………? ウソだって言ってくれよ…………。!)

その間も、頭の中を駆け巡るは先ほどの音遠の告白。
一瞬にして奈落の底に突き落とされ、絶望の未来までも考えてしまふ。

(やめてくれよ……。オレ、音遠ちゃんと別れたくねえよ……。！)
結局、1限には間に合ったものの、授業は完全に上の空であった。
そして昼休み……。翔司の携帯に音遠からの着信が入る。

「……もしもし」

「よかった……。出てくれて。あのね……。お昼ごはん一緒に食べよ？」
「……いいよ。学食で待ってるわ」

そこまで言って通話を切る。普段であれば音遠の方から切るまで自分からは絶対に切る事はなかったが、この時は翔司の方から切っていた。

「……」

「あう……」

「久々だな、翔司」

学食を訪れた翔司の目に飛び込んできた人影は……。灯夜であった。

「……ああ、久々だな」

彼は茫然自失とする翔司に対し冷静に、そして高圧的に言葉をかける。

「お前もここ来てたのかよ。ったく、ヘタレな奴が集まったもんだぜ」

「うっ……」

「へっ、相変わらずの毒舌っぷりだな。……。で、なんでお前までいるんだよ？」

「……ここじゃ話しづれえな。外出るぞ」

3人は喧騒あふれる学食を飛び出し、やや離れたところにある多目的ホールに場所を移した。

そこにあるテーブルに座ると、真っ先に音遠が話し始める。

「ふたりとも……。ケンカしないでね……。お願いだう……」

「そうなりそんな原因を作ったのはどこのどいつだよ」

「みゆ……」

「音遠ちゃんを責めんなよ！ 彼女なりの判断じゃないかよ」

「はっ、これだからヘタレなカップルは嫌なんだよ。お前ら、自分だけの世界しか見えてねえよ」

「どういうことだよ」

「結局なんか本題に入っちまってるみたいだから言うけどよ、その言葉通りだってんだ。お前、音遠の事しか見えてねえだろ」

「くっ……」

「言い返せねえのか？ じゃあその通りなんだな。つたく、お前何のために大学なんか来てんだよ。音遠とイチャイチャするだけなら大学通わなくて出来んだろーが」

灯夜はこれ以上ないというくらいに嫌味に言葉を紡ぐ。

「両親に高い金払わせて大学行って、結局それしかしてねえって親が知ったらどうすんだよ。この親不孝者が」

「お兄ちゃん！ 言い過ぎだよ……」

「言い過ぎて事は、お前にも少しはその心当たりがあるんだな。」

……フン、こうなったのも全部お前のせいなんだからな」

「どうして……？」

「うわー、来たぞこれ。原因が自分にあるってわかってねえ。こんな奴が俺の妹とかマジやめてほしいんだけど」

「おい灯夜。それ以上言ったら例えお前であっても許さねーぞ……」

「許さなかったら何するつもりなんだ、ええ？ ヘタレさんよ。口だけ、口だけ」

「……っ！」

限界だった。翔司は、抑えられない衝動をそのまま灯夜にぶつけようとした……が、その攻撃はひらりとかわされ、逆に自分が関節を極められてしまう。

「落ち着けよ。そんなんじゃ解決しねーよ。……俺も言いすぎたかも知れないけどよ、これで俺からは全部言い放ったつもりだ。……」

ま、仲良くしようぜ」

「お兄ちゃん……もうやめてよ……」

「言われなくなつてやめるよ。何が悲しくて男と密着しなきゃなんねーんだってーの！」

灯夜は強引に密着状態から抜け出す。しかし周囲の視線はこちらに向いていなかった。

翔司はそこで自由になり、若干落ち着きを取り戻した。

「……悪かつたな、いきなり殴りかかつて。……本題だけど、これからどうすればいいんだ……？ オレは」

「それは俺には答えられない。音遠に聞け」

「私……？」

「まだわかんねえのかこの衝撃的馬鹿。お前の身勝手な行動が、どれだけ俺らを振り回してると思ってるんだ。悩む必要のない問題で悩まされるつてのは、まさに今のことだぜ」

「そんな事言われたつて……わかんないものはわかんないんだもん……」

「寝言は寝てから言えよな。どうしてわかんねえんだ！ お前は翔司と付き合ってる。でも俺の事も愛してる。それが間違ってるつて事がどうしてわかんないんだつて言ってるんだよ！」

「わかんないんだもん！！ どうして私はお兄ちゃんを愛しちゃいけないの……？ それがわかんない……」

「俺がお前の兄だから。血の繋がってる兄だから」

「そんなの理由にならない！ 私は確かにあなたの妹。だけど、愛しちゃいけないつて事はないでしょ！？」

「確かに、お前が他に誰とも付き合つてなければ、それに、俺がお前に愛して欲しいつて思えばそれも許されるかも知れないなあ。だけどな、お前の隣にいる奴は誰だ？」

「……翔司くん。私の彼氏……」

「だろ？ 彼氏がいるじゃねえかよ。それに、俺はお前に愛して欲しいなどと頼んだ覚えはない」

「ウソよ！ 以前はちゃんと私を愛してくれてたじゃない！ ちゅーだつてしてくれたし……。それが何よりの証拠じゃないの……？」
「それは期限付きのものだ。『いつか』が来るまでの、な。その『いつか』っつーのは、お前に俺以外に心を許せる奴が出来た時。つまり、翔司と付き合うようになった時からだ」

灯夜は理解力のない妹に心底から嫌気が差してきたのか、音遠から視線を外していた。

「その瞬間から、俺はお前を愛する必要性を失った。そして、それはお前の成長の証。俺から決別し、一人の女性としての第一歩を歩み始めた何よりの証拠じゃねえか」

「そうだけど……そうだけど！ いきなりそんな風に言われたつて納得できないもん！」

「かーっ、なんなんだお前は！？ 納得するだのしねえだの、そんな次元の話じゃねえだろ！ しなきやいけねえんだよ！」

「じゃあ、お兄ちゃんにはできるの？ 私は、今までずうつとずうつとお兄ちゃんを愛してきた。その人が離れる事も簡単に受け止められる？」

「ああできるね。こっちは愛してくれなんて頼んだ覚えはないからよ」

「あつ……」

「よお翔司。お前、さっきからずっとだんまりじゃねえか。なんか言う事ねえのか？」

「くそ……。お前、本当に音遠ちゃんとはもついいのかよ？」

「愚問を投げかけるなよ。いいも何も、俺と音遠はただの兄妹だつての。それ以上でもそれ以下でもねえよ」

「そうか……。そうだよ……。じゃあ本題だ音遠ちゃん。オレは……これからどうしたらいいかな？」

「翔司くんこそどうしたいの……？ ずるいよ、私ばかりに聞いて……」

「へへっ、音遠にまで言われちゃ世話ねえや」

「黙ってる。……オレは……やっぱり音遠ちゃんの事が好きだ。それは変えたくないし変えるつもりもない」

「あつ……。私だってそうだもん……」

「でも、灯夜のこと忘れられないんだろ……？ 決別できないんだろ……？」

「そうだけど……それとこれとは別問題だっと思っててるの。なんだろう、翔司くんを好きな気持ちと、お兄ちゃんを好きな気持ちは全く別なの。だけど、両方とも大切にしていきたい……」

「どう違うんだ？ オレにも分かるように教えてくれないかな」

「うん……。翔司くんは彼氏として、お兄ちゃんはそのままお兄ちゃんとして……」

「ウソつけよ。俺を実の兄として好きっただけなら抱きついたり、キスを強要するわけねえだろが」

「そう言えば……今朝聞いたな、その事」

「もう見てらんねえよお前。言えば言うほどボロ出しちまってんじやんか。そんなんじゃないつか翔司にも愛想尽かされちまうぜ」

「そんなの……そんなのやだ！」

「なあ音遠よ。いい加減二兎を追うのはやめようぜ」

「追ってないもん！ お兄ちゃんはお兄ちゃん、翔司くんは翔司くんで別に好きなんだもん！」

「それが二兎を追うってことだっと思ってんのがなんでわかんねえかなあ……。あーじゃあ、これ以上の議論は意味ないわ。あとはお前らだけで勝手にやってる」

「待てよ！ まだ話は終わって……」

翔司の引きとめも結果を出さず、灯夜はさっさと席を外してしまつた。

その場に残される二人。音遠はおそろおそろ翔司に手を差し伸べる。

「……ごめんなさいなの。私のせいで……」

「……」

無言で彼女の手を握り返す翔司。だが、いつもの力強さはそこにはなかった。

「あれ？　おーい！　翔司くーん！」

5時限目が終わり、教室を出たところを誰かに呼び止められる翔司。

辺りを見回すと、その声の主はすぐ隣にいる事がわかった。

「うおっ！？　なんだ、芽衣ちゃんか……」

彼女の名は上原芽衣。同じ大学に通う、翔司の友人である。

「なんだってことはないでしょー？　ねね、今日は音遠ちゃん一緒にじゃないの？」

「……。あの子、5限ないし……」

「ありゃ、なんかボクまズった……？　あわわ……ごめんね……」

「いや……こつちこそごめん。沈んじゃってて、なんかオレっぽくねーよな。はは……」

「えっと、何かあったの？　ボクでよければ……相談に乗るよ？」

「いや、平気。大丈夫だから……さ」

「ウソ。翔司くんがそんな顔するなんてただ事じゃない！　これから時間ある？」

「……わかったよ。今回もみんなに頼らせてもらっよ」

「そうこなくっちゃ！　じゃ、カフェ行こ？」

「う……うん」

結局、押しに弱い翔司はここでも芽衣に振り回されることになった。

芽衣に連れられてやってきた先は、カフェ『Hexagram』。

翔司が大学に入る前は毎日のように入り浸っていた場所でもある。「いらっしやい。……おや、こりやまた珍しい組み合わせだ。久々

だな、翔司くん」

「ほら翔司くん、カフェだよ。マスターに全部言っちゃいなよっ！」

「わかったよ。マスター…… 久々に来てアレなんだけど、またみんなに助け舟出してもらおう事になりそうだ……」

「構わないさ。最近そういう相談事がなくて暇してたところなんだほれ、全てぶつけてきな！」

ドンと来い、といったジェスチャーを交えながら翔司を励ます男の名は、増田六。マスターの愛称で親しまれている。

彼の頼もしい言葉に気をよくした翔司は、言いよどむことなく全てを告白した。

「……。結論から先に言わせてもらおう。間違っているのは音遠ちゃんだ」

「やっぱりそうか。オレもそうだと思ってたんだけど…… あの子を目の前にしちゃとても言えねーし……」

「その気持ちわかるよ。ボク。周一もね、昔はかなりひねくれてたんだけど、それを本人を目の前にしたら言えなくて……」

「今よりひねくれてたのかよ……。まあ、それはいいや。じゃあオレは、それが間違いだって事を直接本人に言えばいいの？」

「そうする他にはない。キミの口から言えば信じるだろうし」
「なるほど……。でも、あいつの事は……」

「あいつって、お兄ちゃんの事？」
「そう。音遠ちゃんは灯夜のこと好きだって言ってるんだ」

「そこもキミの仕事だ。その気持ちの入れ方は間違っている……って言わなきゃ解決しないよ」

「わかったよ。とりあえず…… 今日はいろいろありすぎた。自分の中で整理しなきゃ、言いたい事も言えないや……」

「僕としては今すぐにでも言いに行った方がいいと思ってるんだが、そこは本人の気持ちだからそれを強要させる権利は僕にはない。ま、久々に来たんだし、ゆっくりしていきな」

「そうさせてもらいます。えっと…… 何にしようかな」

そう言いながら翔司がメニューに目を通し始めた頃、数名の女性客が入店してきた。

「おいつすー！ ……つて、あー！…！ 翔司！」

「こんばんは。あら？ 森野さんではございませんか」

「えっ！？ ホントに！？ ……わぁ、翔司さんだ！ 久しぶりです」

原田みさき、南野優香、橋本瑞奈。いずれもこのカフェの常連であり、翔司の知り合いでもある。

女性3人に声をかけられた翔司を、マスターは茶化す。

「ほほう？ キミ、いつの間にそんな人気者になったんだい？」

「いや、知らねーし！ ただ単に珍しいだけじゃ……」

「何よー！ 来てたならちゃんと言いなさいよね！ 芽衣ちゃんも！」

「えへへ、ごめんごめん」

「みさきは相変わらずだな。優香さんも瑞奈ちゃんも変わらない？」

「ええ、おかげさまで。森野さんは……どこか垢抜けましたわね」

「そ、そうかな？」

「さすがお姉様！ 目の付け所が違いますっ！」

「ねー翔司、そう言えば音遠ちゃんはんごむがつー！」

（みさきちゃんダメー！）

「まみふんのぼー！？（なにすんのよー！？）」

（今はダメなの！ 後で教えるから……とにかく今は音遠ちゃんの話題出すのはやめてあげて！）

「ふぁ、ふぁがっははがふえふおふぁがふいべ……！ ぶ、ぶぐび

……！（わ、わかつたから手を放して……！ く、苦し……！）」

「みさきさん？ 芽衣さん？ 何をなさっているのですか？」

「あーごめんね、みさきちゃんなんかクシャミが止まらないんだつてー。人気者だから噂されてるんだよねー！」

「……芽衣ちゃん、アンタ後で何か奢りなさいよ。4年前死んだおじいちゃんが川の向こうで手招きしてたのが見えたんですけど！？」

「あわわ……ごめんね……。はぁ、ボクってどうして自分の力コントロールできないのかな……？」

「……あ、オレそろそろ帰るわ。明日提出の課題の最終確認とかないとだから……」

突然思い立ったように席を立つ翔司。特に何も言わず、全員に手を振るだけで急いで帰ってしまふ。

「あら、随分と慌しいのね」

「そんなに急いでたのかな……。もっとお話したかったなあ」

「さて……と、芽衣ちゃん？ さっきアタシの言葉を遮った理由、教えてくれるわよね。翔司がいたら話しにくいことだったんでしょ？」

「う、うん。あのね……」

芽衣はみさきたちにも、翔司が抱えている問題を伝えた。

「あっちゃ、それマジ？」

「またですか……。あの子にも困ったものですわね……」

「翔司くんとお兄ちゃんとの板ばさみというか……音遠ちゃんの方がそうしてるんだけどさあ、翔司くんが心配だね……」

「……よっし、わかったわ。アタシが一肌脱ごうじゃないの！」

「やった！ みさきちゃんが協力してくれるなら頼もしいな」

「カン違いしないでよね！ アタシは、音遠ちゃんのために仕方なくやってあげるんだかね！」

「……それ、こないだも聞いた気がするけど？」

「え、そーだっけ？ やーね、そんなの気にしてる場合じゃないっしょ。……さて、そうと決まれば早いところ行動に移さないと……」

言うが早いか、みさきはすぐさま行動に移した。彼女は、何も頼まずカフェから飛び出していったのだ。

「はやい……。かおりゆんがあこがれるのも分かるなあ」

「あの行動力、見習いたいものですわね」

「そうですね。でも！ お姉様はありのままでもいいんですよ！
今のままのお姉様で充分素敵なんですからっ！」

「……」

「みんないろんな悩み抱えてるんだなあ……。ボクには……。うん、今のところはないかな。周一も元気だし、ボクも元気だし」
ストローをくわえながらふと考える芽衣。思い描くは、近い未来の幸せな姿の自分であろうか。

「さて、まずは下準備からね。え〜と音遠ちゃんのメルアドはつと……。これこれ」

カフェを飛び出したみさきはなにやら携帯をいじり始める。

「よし、これでオツケーつと……。次は……」

そうこうしている内にみさきは、いつの間にか音遠たちの家の前に到着していた。

そして、インターホンのボタンに指を乗せる。

ピンポン。

「んあ……。誰だ？ こんな時間に……」

「ほえ？ 誰だろうね」

「さあ？ あ、俺が出るよ。はいはい、どちらさん？」

「その声は灯夜ね！ アタシよ、みさき」

「え？ みさき？ なんだよ？」

「ここじゃんだからさ、ちよつとそこの公園まで行くわよ」

みさきは玄関口から顔を出しただけの灯夜の髪を掴み、強引に外に出そうとした。

「つて、おい！ 痛てーつて！ 準備ぐれえさせろつて……」

「そんなのいいのよ！ ほれ、行くわよ！」

「つたく……。相変わらずだなお前は……。でもサンダルくらい履かせてくれよ」

近くの公園まで来た二人は、手近なベンチに腰掛ける。

先に口を開いたのはみさきの方だった。

「いきなり呼び出してゴメンねー！」
「で、誰に頼まれたんだ？」
「やーだなー、そんなんじゃないわよー！ ……アンタとサシで話
したいって、前から思ってたさ」
「どづいうことだよ？」
「ほら、アレよ。若い男女がこんな夜に二人つきりでする話つつ
たら決まってるじゃん」
「決まってるって……もしや？ ちょ、冗談だろ……？」
「何言ってるんのよ。今更冗談なんか言うわけないじゃん。 ……恋の
話、略してコイバナよ」
「はあ、やつぱそう来るか。で、何で俺がお前なんかと」
「ちーがーう。アタシのことはどーでもよくって、アンタ自身が恋
についてどう考えてるかを聞きたいの。音遠ちゃんの事とかでいる
いるあんでしょー？」
「ふーん……。どういふ風の吹き回しか知らねえけど、俺はお前が
先に話さないと言わないからな。なんたって俺はお前に無理矢理連
れてこられたんだ、そのくらいの権利はあるだろ？」
「くっ……。ホント、アンタって他の連中と違って一筋縄じゃいかな
いわね。ま、それも考えに入ってるからいーんだけど」
「なんのことだよ？ さっきからなんか様子が変だな……」
「気のせいよ！ そんな事言うとなンタから先に話してもらおうよ」
「はいはい、わかったよ。んじゃさつさと話せよ」
「わかったわ。 ……こほん」
みさきはひとつ咳払いを挟むと、灯夜にさらに身を寄せる。
「ちょ……おい？ 何してんだよ？」
「アタシ……アンタの帰りをずっと待ってたんだ」
「は？」
「アンタはアタシらの憧れの的だったのよ。そんなアンタと知り合
えて……すごく光栄だと思った」
「だからどづいう……」

「わからないの!? アタシ、アンタの事が好きなの! 大好きなの!」

「えっ…………!?!?」

告白を終えたみさきの目には涙が浮かんで…………いない。

実は、彼女は演技をしている真っ最中であつたのだ。

その事がまだ気づかれていないと見ると、みさきはさらに攻める。
「わからないの? アンタが留学するって聞いた時、悲しんだのは音遠ちゃんだけじゃないの。アタシもつらかつた! 毎日泣いてた…………学校にだつて行けなかつた」

「え…………お前、学校今まで休んだ事ないつてのが自慢だつたんじゃ…………」

「そんな自慢もうできない! 学校なんかより…………アンタの事が大切だつたんだからあ! うぐっ…………」

だが、ここに来てみさきの目に本当の涙が浮かんできた。演技に力を入れすぎているのだから、それがより言動に信憑性を増してゆく。

「…………何泣いてんだよ。ほら」

「え…………? あっ…………」

不意にみさきは抱き寄せられる感覚を覚えた。演技に力を入れるあまりに流れた涙がこんな結果を引き寄せようとは、さすがの彼女にも想定外だつたようだ。

(ちよ、待つてよ! コイツ何暴走してんのよ! ……つたく、アタシがこんなセリフ吐くことになるーとはね。っーか音遠ちゃんまだ!?)

心の中で悪態を吐きながら、みさきは用意していたセリフを語る。

「あり…………がとう…………。アンタつて…………優しいね…………」

「ありがとさん…………。実は俺も…………みさきのことは前からいいな
ーって…………思つてた」

「マジで?」

「ああ、これはマジ。ていうかよ、俺身近にあんな手のかかる奴が

いるだろ？ だからさ……誰かに甘えたいっつーか……ほら、姉さんみたいな人に憧れてたんだ」

「アンタでもそんな気が起こったりするんだ……」

「そりゃそうだ、俺は本当は繊細なんだぜ？ ……それにお前はさ、みんなをまとめる姐御役って感じがするから、俺の憧れにぴったりで」

「そう……なの……」

「だから、初恋は年上の人だった。でもうまくいかなくてさ……。きつと、甘えたい甘えたいってというのが前面に出すぎてたんだろっな……」

（……で？ アタシはアンタの初恋になんか興味ないんですけど？ 自分から恋の話をしろと振ったわりには失礼な考えである。

「はは、もう思い出したくない過去だったのに……思い出しまったじゃ……ねえかよ……」

灯夜はふと、上を向いた。涙を堪えているのだ。

こんな光景を見せられてしまっっては、みさきも驚くしかない。

そんな彼女から出た言葉は演技ではなく、素直な謝罪の気持ちだった。

「……ごめん。だったらさ、アタシに甘えなよ……」

（こりゃちつとアレだわ……。じゃあ、このまま仕上げに入るとしますかね）

「……いいのか？ こんな男、いつものお前だったら突っぱねそうで……」

「もーバカね……。アタシが心を許したんだから……いいに決まってるじゃん……。アンタっていつつもそうだけどさ、たまには凹んだっていいじゃん……」

「わかった……。その言葉に……。甘えさせてもらっぜ……」

灯夜はみさきに正面から向き直る。その目からは今にも涙がこぼれそうだ。

（うわうわ、こいつ半ベソかいてるし！ あーやべ、なんか動悸が

激しくなってきた気が……。てか音遠ちゃん遅いんですけど!?)
自分の考えた計画が思い通りに進まないので、つい心の中の声がきついものになってしまう。

その時だった。二人の前には、信じられないものを見てしまったという表情の音遠が佇んでいたのだ。

「お兄ちゃん!? ……みさきちゃんも、何やってんの……?」

(やっと来たのね!? ったく……あやうくマジになっちゃいそーだったわ。さて……ここから重要よ、みさき!)

「……ごめんね音遠ちゃん。こういう事なんだ。アタシ、兄貴の事マジなのよ」

「驚かせたい事があるからってのは……これだったの……?」

「どういうことだ? 音遠」

「さっきね、みさきちゃんからメールが来たの。『音遠ちゃんをビックリさせてあげるから待ってて』って。だから、さっきおうちに来たのがみさきちゃんだなんて思わなかった……」

みさきの計画とは、こうだ。

まずは音遠に『ビックリさせてあげるけど、準備があるから少ししたら公園に来てね』といった文面のメールを送り、彼女を自宅に少しの間待機させる。

その間に灯夜だけを音遠に気づかれぬように同じ場所に誘い、言葉巧みに彼を籠絡する。

音遠が来たら、自分と灯夜はこういう関係になったということを告げ、音遠が兄に向ける気持ちや断ち切らせる。

これこそが、みさきが翔司のために考えた計画である。当然、翔司のためにやったということが発覚しては意味がなくなるのだが。

「ごめんね、なんか不意打ちみたいなの真似して。でも、本気なんだからね。アタシも兄貴も。ね?」

「……ああ」

「ひどい……。ひどいよみさきちゃん……。! どうして奪うような真似するの……? お兄ちゃんもお兄ちゃんだよ、私に裏切るなっ

て言っておいて自分も裏切ってるじゃないの……」

「馬鹿も休み休み言え。俺がいつお前を好きだなんて言った。お前が勝手に俺の事を好きになってるだけだろうが」

「ウソ。前に言ってたもん。『何だかんだ言っても、こいつの事好きだ』って!」

「だから……それは『妹として』好きっていう意味であつて『彼女として』じゃねえよ。そんなのもわかんねえなんてやっぱお前はどうしようもない大たわけだな」

(おーおー、いっちょ前に修羅場ってるわねー)

「ともかく、俺はこうしてみさきと付き合つことになりそうだから、どっちにしるお前とはもう終わりなんだ。これで諦める。な? 諦めて翔司一筋にしる」

「……ばかぁ!……!……!」

ばしいい……ん。

乾いた音が、人気のない公園内に響き渡る。

妹が、ついに兄に手を上げた瞬間であつた。

「もう……知らない! お兄ちゃんなんか……だいつ嫌い!……!」

……うわあぁ~~~~ん!!」

「音遠ちゃん! 待って!」

「来ないで! みさきちゃんも……だいつ嫌いなんだからあ……!」

「あつちや~~~~……。やりすぎちつたかな……?」

「み、みさき……?」

「ごめん、さっきの話……ちよつとだけ保留させてくれないかな」

「え……?」

「あとね、どんな理由があつたにせよ、女の子を泣かすなんて最低な奴のする事だかね。そこんとこちゃんと理解しなさいよ。……またね」

それだけ言い残し、みさきはさっさと立ち去ってゆく。まるで先

ほどまで本当に何事もなかったかのように。

(ちつとやりすぎたかも知れないけど、これでいいのよね……。でも、これじゃ灯夜の奴があまりにも報われないような気もするわね) その通りである。灯夜は理不尽に外に連れ出され、突然告白されたかと思えば保留にしてくれと言われ、妹に対して正論を述べたら平手打ちを食らった。

自分はなにもししていないはずなのに、痛む頬と決壊寸前の涙腺が残ってしまった。

こうして今日もまた、女性を恐れる男性が増えてゆくのだ。

(お、女はおそろしや……。！ お、俺が何をしたと……。？ もーイヤだ！ 取るべき単位が卒業だけになったらガチで引きこもる！！ お、俺は金輪際女と関わらんぞ！ 留学中に仲良くなったヒナともだああああ！！！！！！)

その頃音遠は、泣いて崩れた顔を直すこともなく、一直線に翔司の家に向かっていった。

「……。いいもん。お兄ちゃんの望み通り、本当に翔司くんの彼女になるんだから！」

自分に言い聞かせるように力強く言う音遠。そして、意を決して翔司の家のインターホンを鳴らす。

「誰だ？ 課題中だったのに……。はいよ、どちらさんですか……。つて、音遠ちゃん！？ どうしたの？」

「……。ごめんねいきなり。あのさ、中に入ってもいいかな……。？」

「う、うん……。っーか音遠ちゃん、目が赤いぜ……。？」

「……。それも後で話すから、お部屋に入れてなの……。？」

「あ、ああ……。あんま片付いてないけどね、はは……。？」

音遠の突然の訪問に驚きをあらわにしつつも、若干笑みを浮かべて自分の部屋へ迎え入れる。

「……。どうしたの？ いきなり。あ、そこ座りなよ」「

「ありがとなの。……。んしょっと」

そう言いながら傍らのベッドに腰をかける音遠。その際、彼女の二つに結んだ髪が揺れると同時に、髪から漂う心地よい香りが翔司の鼻腔をくすぐった。

「隣に来てなの……………」

「あ、うん……………。よっこいしょ」

言われるがまま、音遠の隣に座り込む翔司。

……………そして直後に、音遠は翔司に抱きつくのであった。

「えっ……………？」

「……………抱きしめてなの。ぎゅって……………抱きしめてほしいの……………！」

「そりゃもちろんだけど……………さつきからどうしたのさ、音遠ちゃん。なんかどっか変だぜ。言ってくんなきゃわかんねーよ」

小さな彼女を強く、だが大切に抱きしめる翔司は、不意にそんな質問を投げかけていた。

抱かれる事で落ち着きを取り戻したか、ようやく音遠も少しずつ言葉を紡ぐようになった。

「あのね……………？ 私、お兄ちゃんと本気で決別してきた」

「マジで？ つーか、音遠ちゃんはそれでいいの？」

「いいの。あの人には……………私以外に好きな人が出来たみたいだし」

「そう……………か。そこは聞くべき所じゃないと思うから聞かないけど

……………よく決心できたね」

「うん……………ありがとなの」

「なるほどなあ……………。それじゃあ、せっかくオレが用意してきた答えも意味なくなっちまうなあ」

「なあに……………？ それ」

「灯夜と、俺と同じように接するのは間違ってる……………って。オレ、明日にでも言いに行こうと思ったんだけど、まさか今日音遠ちゃんの方から言われるとは思わなかったよ」

「そうだったんだ……………。でも安心して。私が本当に愛するのは……………もうあなたただだから……………」

「ありがとう……………。それじゃさ、もう一度改めて言わせてくれない

かな？ もうあんまり意味ないけど、せっかく用意したんだし……」

「どうぞなの……」

「……えっと。音遠ちゃんが、灯夜に抱く感情は間違ってる。実の兄貴なんだし、あいつもそう言ってるんだし」

「うん……」

「だからさ、これからはあいつを兄として見て、オレのことは……か、彼氏として……ちゃんと見て欲しい……。こう言ったらアレかもだけど」

「なあに……？」

「……お、オレだけを……見て欲しいんだ。オレだけを……愛して欲しいんだ。オレも……音遠ちゃんだけを愛するから……さ」

顔を紅潮させつつも、そこまできっぱりと言い切った翔司。そして……言いようのない高揚感に包まれた後、感極まった音遠にキスをされる。

「ありがとなの……ありがとなの……！ 絶対の約束なの！ 翔司くんだけを……あなただけを……ずっつとずっつと愛するの……！」

涙ながらに言い切る音遠にキスで返事をする翔司。そして、ゆっくりとベッドに横たわらせる。

「う……？ どうしたの……？」

「音遠ちゃん……。オレ、もっとキミを愛してあげたいんだ……。だから……」

「や……ちよつと待ってなの……」

「え？ なんで……？」

「心の準備……出来てないもん……」

「え？ なんのことさ」

「え……？ だって……する、んじやないの……？」

「何を？」

「え……えっちな事……」

「ぶー！？ ちよ、つて、ええ！？」

「違うの……?」

「ちーがーうって。つーかオレにそんな度胸あるかって話だよ」

「じゃあどうして寝かせたの?」

「より近づきたかったから。てか、何想像してんのさ音遠ちゃん。意外とアレなんだな」

「ぶう〜、アレってなんだう〜。……安心してね、お兄ちゃんとはそういう事しなかったから」

「わかってる。あいつはそういう話は大好きだけど、実際にやるよ
うな奴じゃないって事はオレが一番よく知ってる」

「だよ。お兄ちゃんとは……ちゅーはしたけどそれ以上はしな
かったもん……。されてもよかったんだけどね」

「そ……っか。でも安心しな、オレも実際にはしない……ってかま
だ早いと思うからさ」

「……うん。で、ここからどうしてくれるつもりだったの……?」

「それなんだけど……、これから何が起こっても驚かないでね」

「う、うん……。わかったなの」

「じゃあ……いくよ」

「……っ。ん……っ」

翔司はベッドに寝かせた音遠と同じように自分も横たわり、その
まま彼女を抱きしめ、キスを交わす。

ここまでは今まで幾度となく重ねてきた行為と変わらないが、そ
こから先が違っていた。

翔司はそのまま、自分のものを音遠の口内へと滑り込ませていっ
た。

(ひゃ……うん……っ)

彼らが経験してきた数回のキスの中でも偶然に互いの舌が触れ合
う事はあったが、こうして意図的に触れ合うのはこの時が初めてで
あった。

当初は戸惑い気味であった音遠も少しずつ翔司の意図を読み取り、
自分も同じ事をし始めた。

(ふぁ……うっ……。んっ……)

翔司が音遠を攻める。だが、直後に音遠も攻め返す。静かな部屋には、二人の舌が絡み合う音が静かに流れ始めてきていた。

その音は次第に激しさを増し、それに比例するかのごとく二人の動きも大きくなってゆく。

(ん……んくっ……。ふう……ん……)

そして5分後……どちらともなく唇を離す。だが、それでも二人の間に生じた細く透明な糸状のものは、しばらく消える事は無かった。

「はう……。すっごく……。気持ちよかったの……。なんだか……とろけちゃいそうだった……」

「オレも……。音遠ちゃん、これがいわゆる大人のキスってやつだよ」

「大人の……。キス？ 今みたいにするのが？」

「そ……。もし音遠ちゃんさえよければ……。いつだってやってあげたいって思ってるんだけど……。どうかな？」

「……。喜んで、なの。こんなに気持ちいいのだったら……。いつだってしたいと思うの。ううん……。あなたと一緒にいるときは……。ずっとそうしててもいいくらい……」

「ありがとう……。あとさ、たまには唇以外の場所にもして……。いいかな？」

「え……。？ ちゅーってお口とほっぺ以外にもしているの……？」

「あらら……。あ、当たり前だよ。つーかしちやいけけない場所なんか……。ないんじゃない？ いや、わかんないけどね。触れられるとイヤな場所はイヤっしょ？」

「それもそうだね……。でも、翔司くんならどこ触れられてもいいの……」

「……え？」

「にゃう〜、聞かなかった事にしてなの〜!」

「わかったわかった。……で、今日はどうする？」
「……一緒に寝たいの」
「そう言うと思った。オレもそうしたかったし、さ」
「わあ〜い！ 翔司くん大好きなの〜！ きゃう〜」
心底から嬉しそうに翔司と密着する音遠。その体全体で表現される恋心を、翔司はなんとか全て受け止める。
そしてこの日は、そのままの体勢で二人して眠りにつく事になった。

「……ふ〜っ」

「うひゃっほおお!?」

昨日に引き続いて朝早くから情けない声を発する翔司。原因は、やはり傍らの少女にあった。

「きゃははっ またおんなじ反応だね」

「ちょ、だからさあ〜、耳に息吹きかけるのは反則だっ〜」

「だっ〜てえ〜、こっした後の翔司くんがかわいいんだも〜ん！ きゃう〜」

「おっとな……でもありがとな。こんなオレにここまで尽くしてくれて」

「も〜、それは言いつこなし!」

「あつと、ごめんよ。……っーか！ 昨日帰らなくて大丈夫だったの？ 連絡も入れてなかったと思うし」

「うん。お母さんもわかってると思うし。それにもう私、20歳過ぎた大人だよ？ 自分の行動くらいは責任持つよ」

「およよ、頼もしいなあ。……ならば、昨日できなかった事しようぜ」

「なあに？」

「一緒に……学校行くの」

「うん！ 嬉しいの、嬉しいの〜!」

「おーよ！ オレも嬉しいぜ〜!」

翔司は嬉しさのあまり、音遠を押し倒すような体勢になった。

「あつ……わりー」

「いいの……。ね……。このまま……。ちゅーしてなの……」

「うん……」

ベッドに寝転んだ音遠が目を閉じる。そんな彼女の瑞々しい箇所
に少しずつ近づくと翔司。

そして、二人の距離がいよいよ無くなるうとしたその瞬間……不
意にドアが開けられた。

「こらー！ 翔司！ 朝ごはん出来てんのよ！ 片付かないからさ
つさと……つて、あららら……お母さんお邪魔しちゃったわ」

「……か、かーさん……！」

「あつ……。おばさん……」

「あーら音遠ちゃんじゃないの。いつ来てたの？ そーだそーだ、
せつかくだからあなたもごはん食べてきなさいよ」

「それはいいけど……。かーさん、もうちょっと空気読んでくれっつ
ーか、部屋に入る時くらいノックしてくれよ〜マジ」

「ごめんねー。まさかあんな事になってるなんてね〜。ホッホホホ
ホ」

「あんな事つてなんだよ！？ ……うあ、腹へった〜。よっしや音
遠ちゃん、下行こーぜ！」

「うん！」

元氣よくベッドから降りた翔司と音遠は、翔司の母の脇をすり抜
けて階下に降りてゆく。

「あら、意外とベッド周りはキレイじゃないの。はは〜ん、あの子
つたらまた踏ん切りがつかなかったのね？ いざって時に踏み切れ
ないところまであの人に似なくてもいいのにね」

母は全てお見通しであった。

「それじゃ行つてきますー！」

「こちそうさまでした〜。行つてきますー！」

翔司が乗る自転車の後ろに音遠が乗り、そのまま大学へと出発する。

これから15分ほど進めば、彼らの通う牧浜大学に到着できる。

「音遠ちゃん！ 今日の調子はどうよ？」

「もーさいこ〜！ 翔司くん大好きなの〜！」

「オレも〜！ 音遠ちゃん大好きだぜ〜！」

「きゃう〜 絶対離さないの〜！」

その言葉と共に、翔司を掴む腕にさらに力を込める音遠であった。

どこかの場所のどこかの時代、今日も彼らは生きている。

そして何かを、いつも探し求めている。それは、誰もが夢見る『

Precious Melody』。

あなたもきつと、見つけるはず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4215o/>

Precious Melody 2plus "Vividly";

2011年1月11日23時13分発行